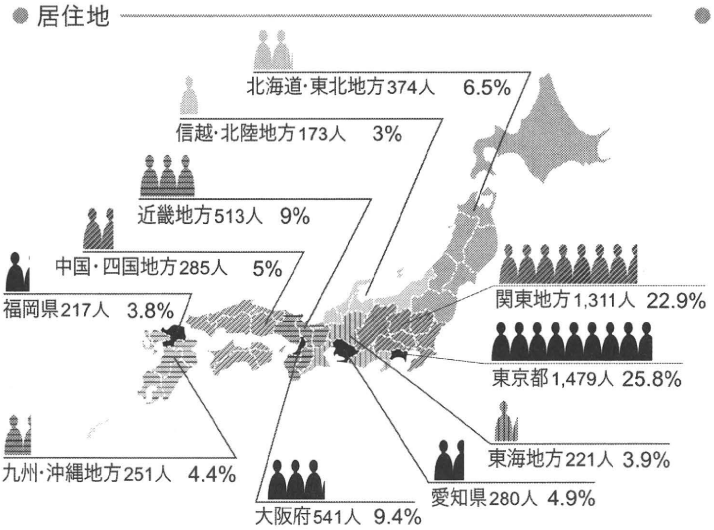
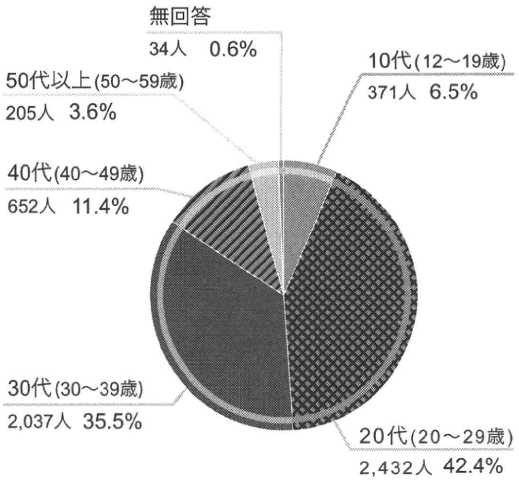
⑤ REACH Online 2005 研究参加者の基本属性 (有効回答数5,731人)

● 居住地



● 年齢分布



● 基本属性

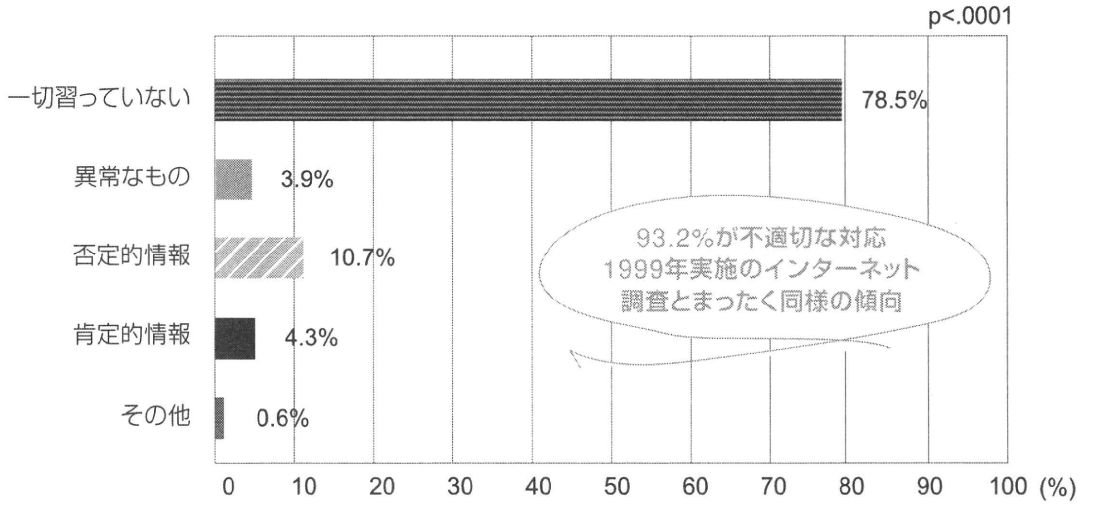
基本属性	人数	%
自認する性的指向		
ゲイ	3,868	67.5
バイセクシュアル	1,484	25.9
ヘテロセクシュアル	48	0.8
決めたくない	172	3.0
判らない	120	2.1
その他	17	0.3
無回答	22	0.4
学歴		
大学院修了（在）	476	8.3
大学卒（在）	2,759	48.1
短大卒（在）	159	2.8
専門学校卒（在）	870	15.2
高校卒（在）	1,294	22.6
中学卒（在）	155	2.7
無回答	18	0.3
職業		
学生	931	16.2
パートタイム	570	9.9
フルタイム	3,538	61.7
無職	288	5.0
その他	386	6.7
無回答	18	0.3
婚姻形態		
未婚	5,013	87.5
既婚	488	8.5
別居中	20	0.3
離婚	161	2.8
死別	8	0.1
無回答	44	0.7
恋人がいる		
相手が男性	2,361	41.2
セックスフレンドがいる		
相手が男性	1,904	33.2
心を許せるゲイ・バイセクシュアルの友達		
いる	3,731	65.1
心を許せる異性愛の友達		
いる	3,361	58.6

基本属性	人数	%
肝炎予防ワクチン接種あり		
A型肝炎	178	3.1
B型肝炎	335	5.8
過去1年間の献血		
あり	718	12.5
親へのカミングアウト		
カミングアウトしている	791	13.8
両親ともに	417	7.3
母親のみ	341	6.0
父親のみ	33	0.6
親以外へのカミングアウト		
カミングアウトしている	2,546	44.4
1人だけ	478	8.3
2人～3人	637	11.1
4人～5人	428	7.5
6人～9人	165	2.9
10人以上	757	13.2
過去6ヶ月間にコンドームを買ったこと		
あり	2,343	40.9
過去1年間にコンドームを買ったこと		
あり	3,026	52.8
スポーツクラブ		
入会している	1,568	27.4
喫煙状況		
吸わない	3,170	55.3
時々吸う	359	6.3
毎日吸う	2,155	37.6
飲酒状況		
飲まない	1,562	27.3
時々飲む	3,279	57.2
毎日飲む	853	14.9
日本に同性婚の制度があればいいと思う		
そう思う	3,363	58.7
そう思わない	656	11.4
どちらとも言えない	1,674	29.2

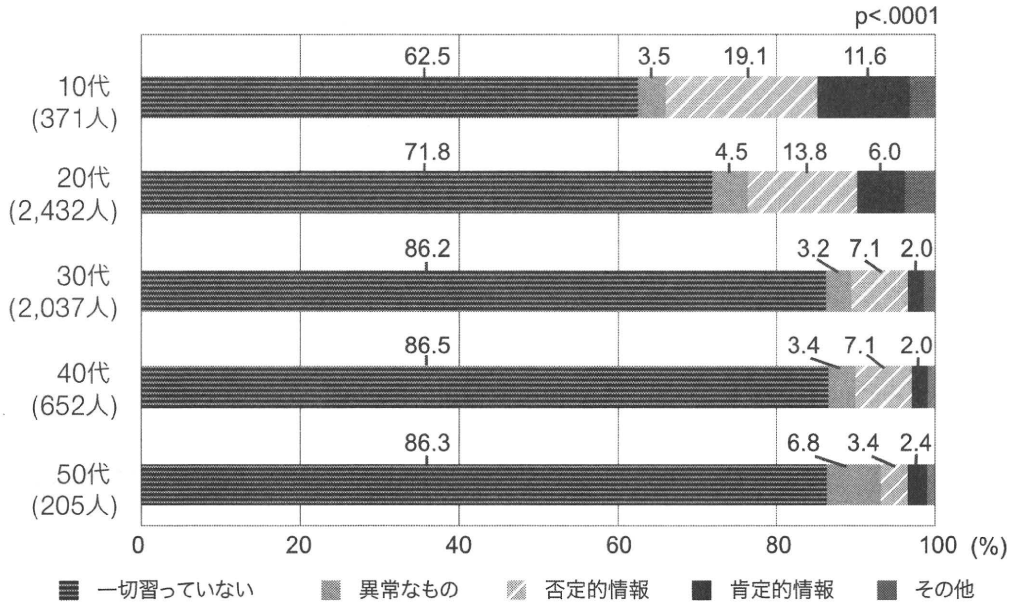
教育現場における同性愛についての情報提供

学校で同性愛について「一切習っていない」が全体の78.5%、「異常なもの」が3.9%、「否定的情報」が10.7%であり、これまでに全体の93%以上が教育現場において同性愛について不適切な情報提供や対応をされていることが明らかになっています。この結果は1999年実施の調査結果と全く同様の傾向でした。現行のわが国の学習指導要領など教育現場のガイドラインに、性的指向を含めたセクシュアリティについての教育方法は何ら明示されていません。そのため、教育現場では多様なセクシュアリティの取り扱いに躊躇する場合があることも推察できます。しかしながら、同性愛について否定的な情報提供をされた者は全体の10%を超え、10代ではその割合は19.1%にのぼっており、5人に1人は教育現場で否定的な情報を与えられていることが示唆されています ⑥。1学級に1人～2人は存在すると見積もられる非異性愛の児童・生徒に対して、同性愛をはじめとする性的指向やセクシュアリティに関して少なくとも中立的・客観的な情報提供が必要と考えられます。

⑥ 教育現場における同性愛の扱い （有効回答数5,731人）



年代別では

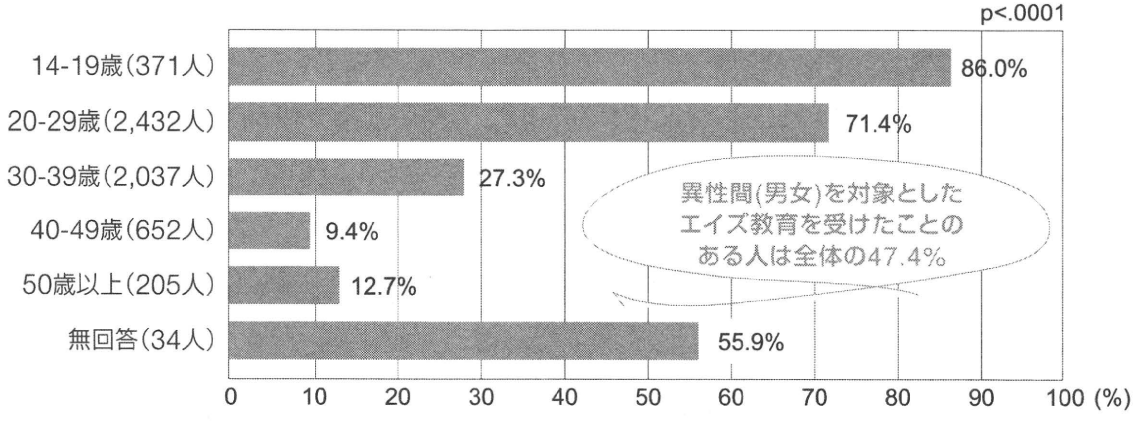


エイズ予防教育（男女、男性同性間対象それぞれ）

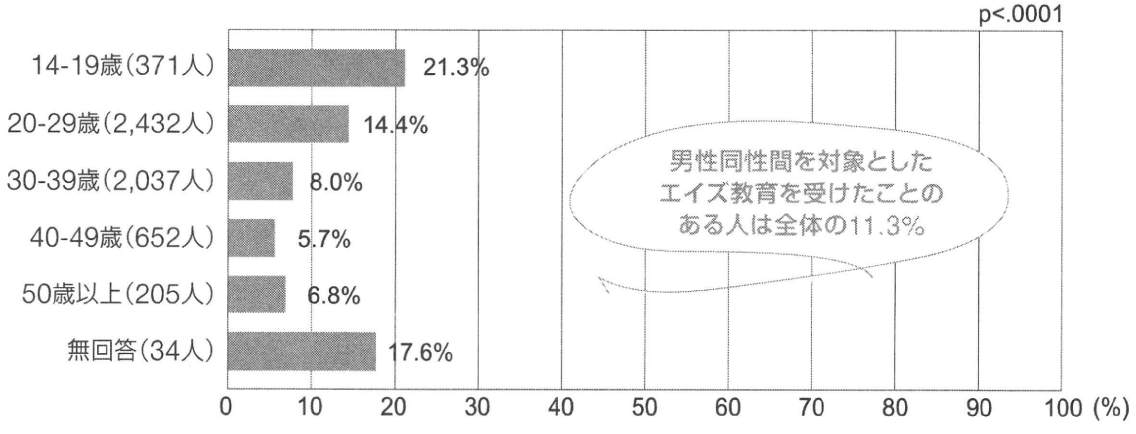
これまでの学校教育等においてエイズ予防教育を受けてきたかどうか尋ねました。男女間のHIV感染の予防教育を受けたことがある人の割合は全体の47.4%であり、10代は86.0%、20代は71.4%、30代は27.3%であり、若年層のその割合は高い傾向にありました。また、男性同性間におけるHIV感染予防教育を受けたことがある人は全体の11.3%であり、男女間の教育と比較するとその割合は明らかに低いことが示唆されました❼。わが国では男性同性間の性的接触によるHIV感染の拡大が最も顕著であるにも関わらず、教育現場におけるHIV予防教育の内容は必ずしも実態に即しているとは言えない現状にあると考えられます。

❼これまでに学校でエイズ教育を受けた割合　(有効回答数5,731人)

● 異性間(男女)を対象とした教育



● 男性同性間を対象とした教育

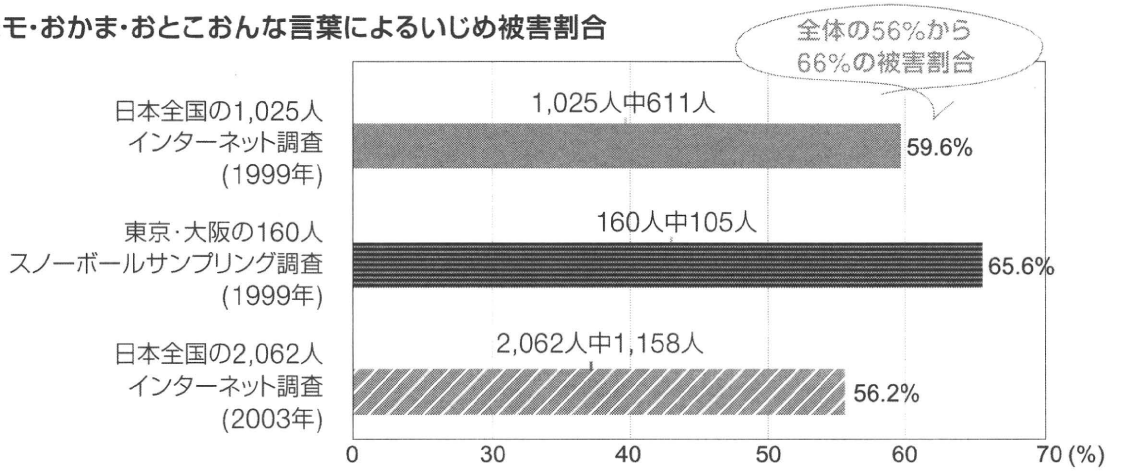


いじめ被害、避難場としての保健室、性被害

先行研究においてもゲイ・バイセクシュアル男性のいじめ被害割合が概して高いことや、学校教育現場における適応の問題など指摘されていますが❽、本研究においても同様の結果でした。これまでに、「学校で仲間はずれにされていると感じたことがある」人は全体の42.7%、「教室で居心地の悪さを感じたこと」は57.0%、「ホモ・おかま」言葉による暴力被害は54.5%、「言葉以外のいじめ被害」は45.1%でした。

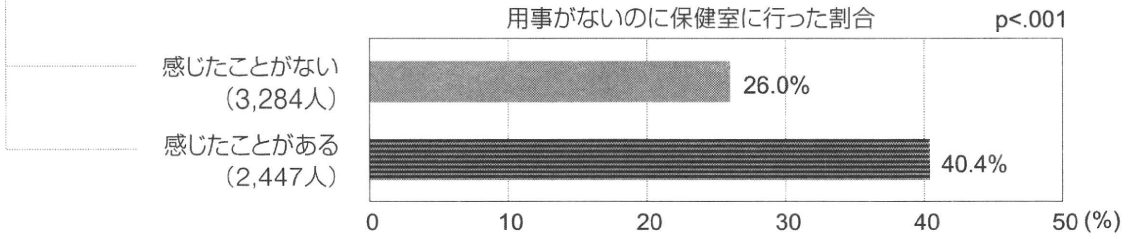
また、こういった学校生活における葛藤や適応の困難があった人ほど、用事がないのに保健室に行った割合は有意に高いことが示されました❾。また、これまでの性被害経験割合は21.4%でした。

❽ ホモ・おかま・おとこおんな言葉によるいじめ被害割合

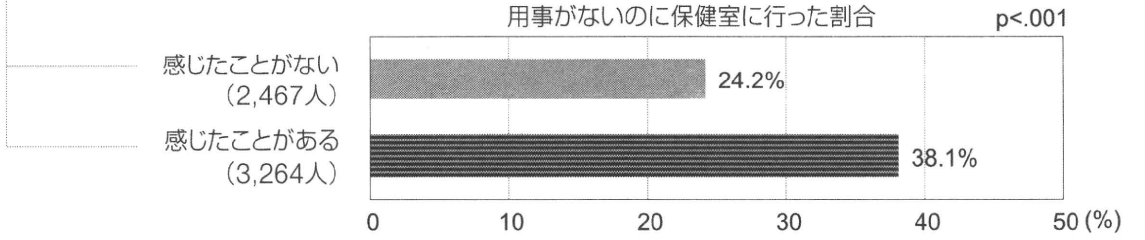


❾ 教室での出来事と保健室　(有効回答数5,731人)

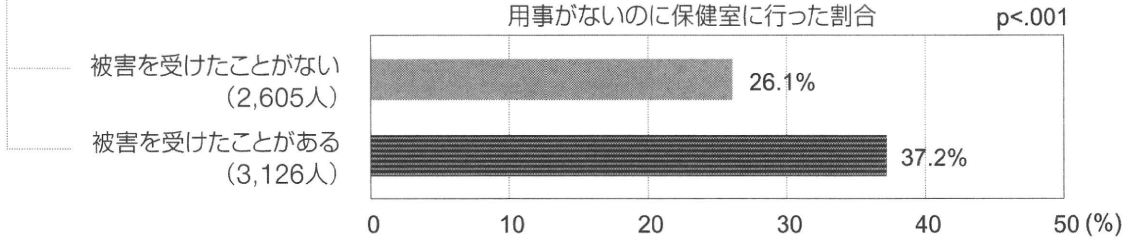
● **学校で仲間はずれにされていると感じたこと(全体で42.7%)**



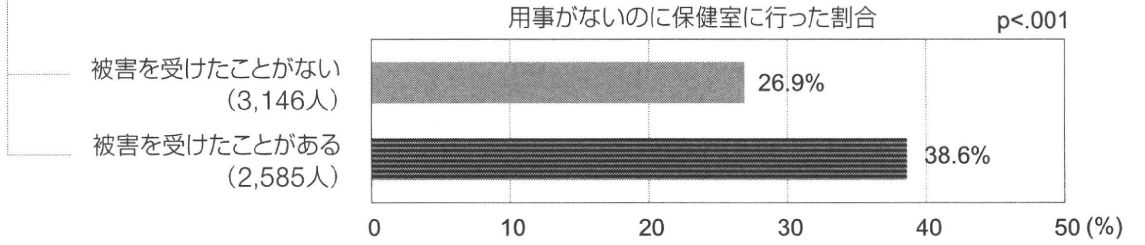
● **教室で居心地の悪さを感じたこと(全体で57.0%)**



● **「ホモ、おかま」などの言葉による暴力被害(全体で54.5%)**



● **言葉以外のいじめ被害(全体で45.1%)**



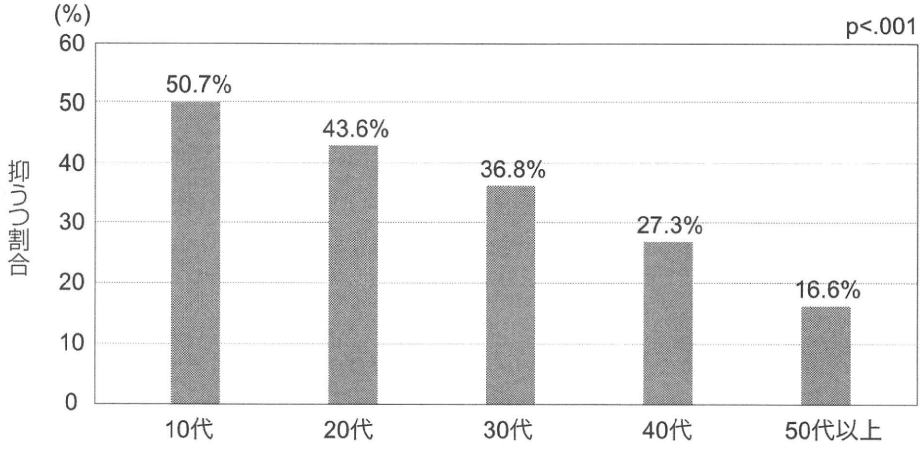
心の健康状態―抑うつ・自尊感情、自殺を考えたこと

心の健康状態を測定するために、CES-D 抑うつ尺度およびRosenberg自尊感情尺度を用いました。その結果、年齢が若いほど抑うつ度合いは高く、自尊感情は低いことが示されました⑩⑪。

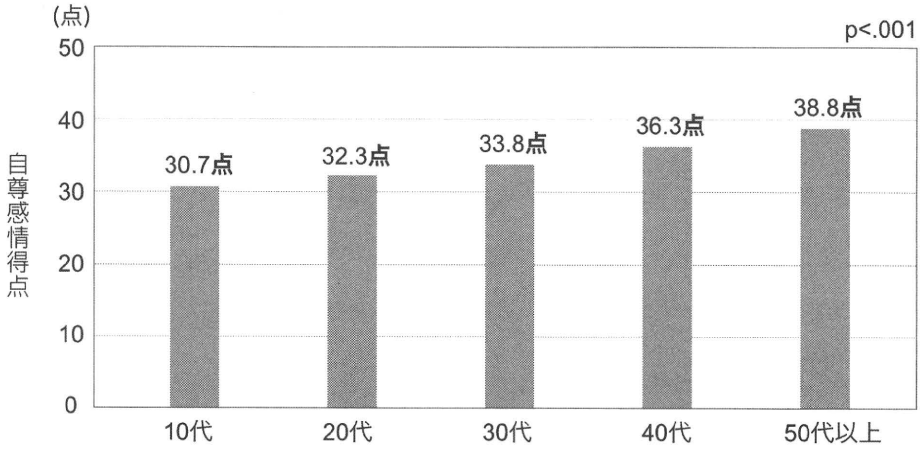
わが国の自殺既遂者は年間3万人を超えますが、自殺未遂の実態について国レベルで詳細に把握できている状況にありません。また、自殺既遂者の動機や背景要因を記録する際に性的指向の視点は含まれておらず、その関連は何も明らかになっていないのが現状です。ゲイ・バイセクシュアル男性の自殺念慮、自殺未遂割合については1999年実施のインターネット調査（有効回答数1,025人）の結果と比較してみるとその割合に何ら変わりなく、全体の65%はこれまでに自殺を考えたことがあり（自殺念慮）、15%前後は実際に自殺未遂の経験がありました⑫。

1999年調査の調査データを用いて、自殺未遂に関連する要因を多変量解析で詳細に分析しました。その結果、自殺未遂に有意に関連する要因が明らかとなりました。大卒以上の最終学歴がある者はそれ以外の者より0.54倍自殺未遂に関連があり、精神的ストレスが強いほど2.1倍、「ホモ・おかま」言葉によるいじめ被害経験があると1.6倍、女性と性経験があると1.7倍、6人以上に性的指向をカミングアウトしていれば3.2倍、インターネットを通じた男性との出会い経験は1.6倍、それぞれ自殺未遂に関連があることが示されました⑬。

⑩ 年齢と抑うつの関連

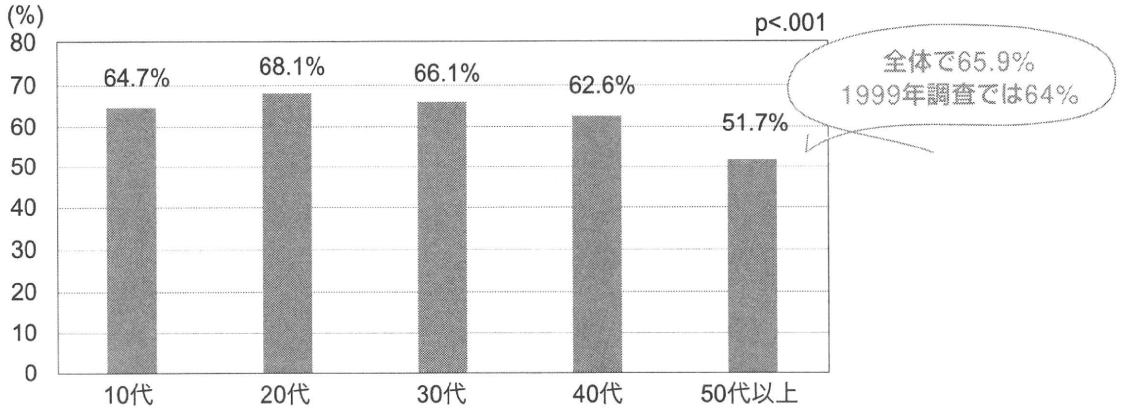


⑪ 年齢と自尊感情

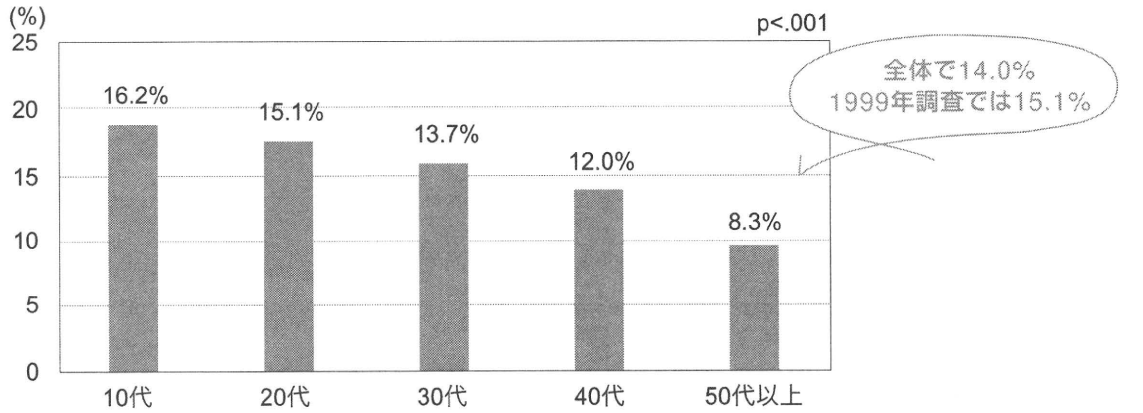


⑫ これまでに自殺を考えたこと・自殺未遂（有効回答数5,731人）

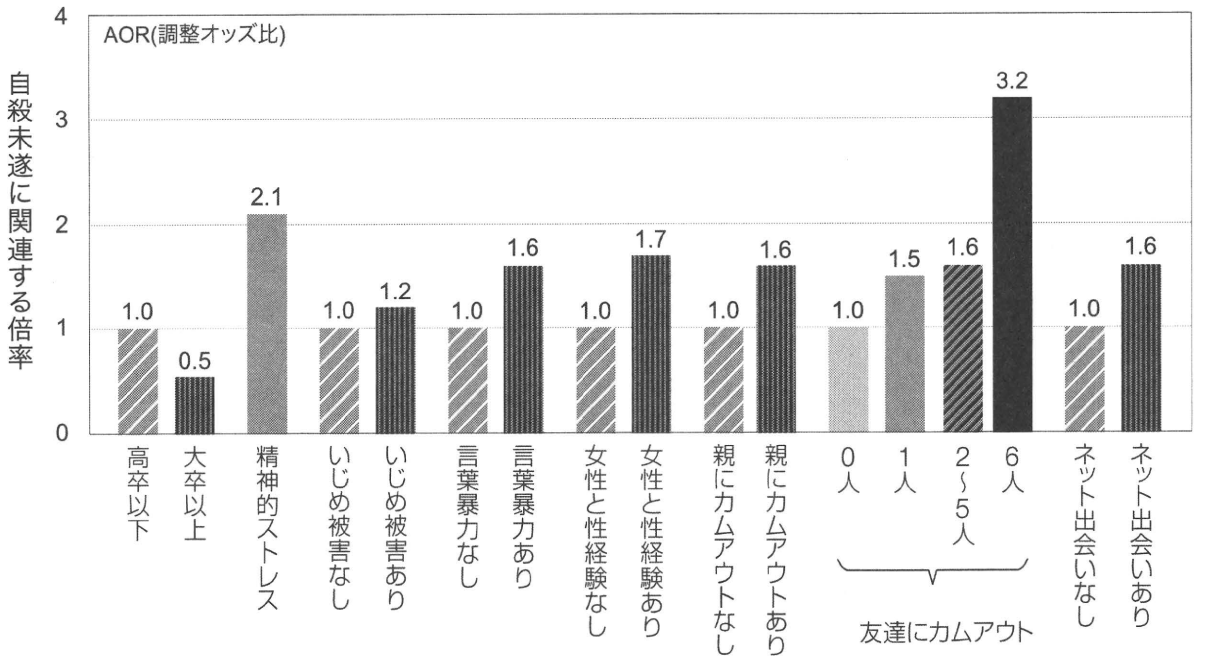
● 自殺を考えたこと



● 自殺未遂



⑬ 自殺未遂に関連する要因（1999年調査　有効回答数1,025人）



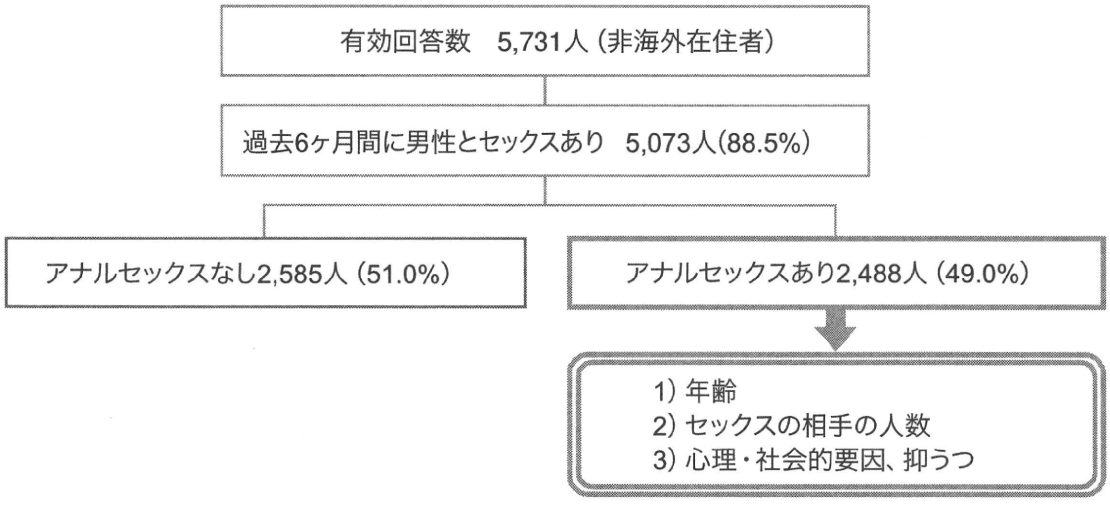
出典
Hidaka Y, Operario D.
Attempted suicide, psychological health and exposure to harassment among Japanese homosexual, bisexual or other men questioning their sexual orientation recruited via the internet.
Journal of Epidemiology and Community Health,60:962-967,2006

過去6ヶ月間のコンドーム使用状況

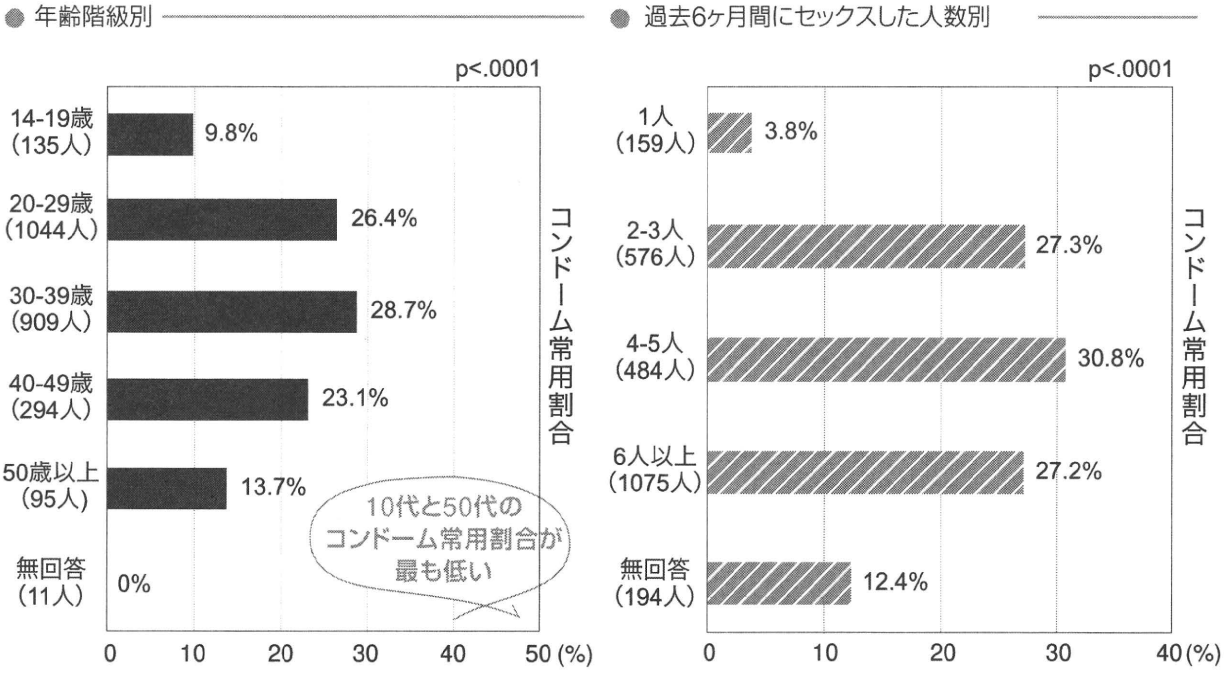
回答者のうち、89%が過去6ヶ月間に男性とセックス経験があり、そのうちアナルセックス経験者は49%でした⑭。本調査ではHIV感染の可能性の最も高い行為を「コンドームを使わないアナルセックス」と捉えており、アナルセックス時におけるコンドーム使用状況について分析しました。過去6ヶ月間におけるアナルセックス経験者のコンドーム常用状況を年齢階級別に分析すると、常用(必ず使った)割合は10代と50代以上が低く、年齢が上がるにつれて常用割合も増加傾向にありました。しかし35歳以上になると、常用割合は減少傾向に転じていました。

次に過去6ヶ月間のコンドーム使用状況を過去6ヶ月間のセックスした人数別に分析すると、5人までであれば人数が多いほど常用割合は高い傾向にありました⑮。

⑭ 過去6ヶ月間アナルセックス経験者のコンドームを毎回使わないことに関連する理由は何か?



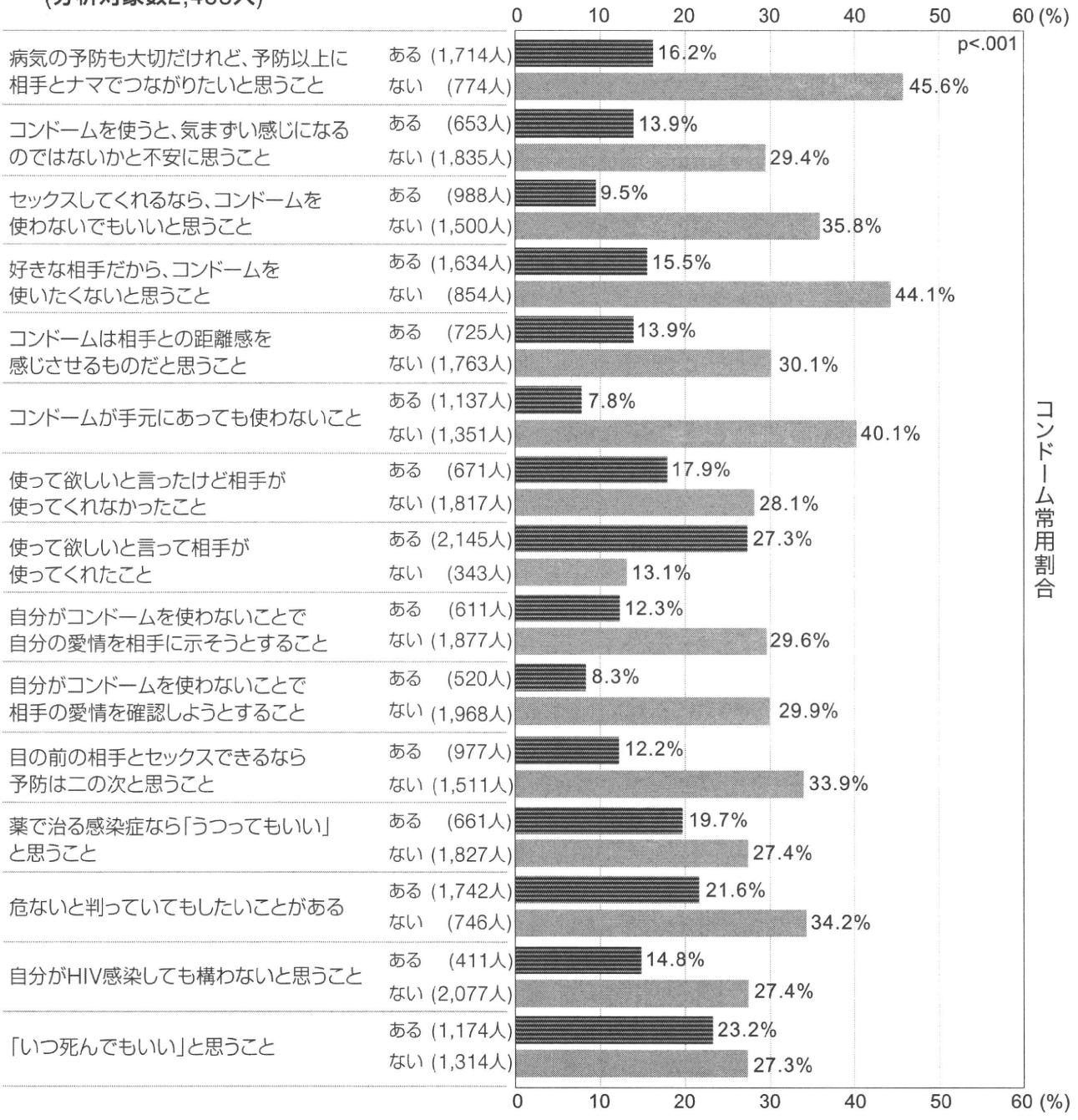
⑮ コンドーム常用割合



過去6ヶ月間のコンドーム使用に関連する心理・社会的要因

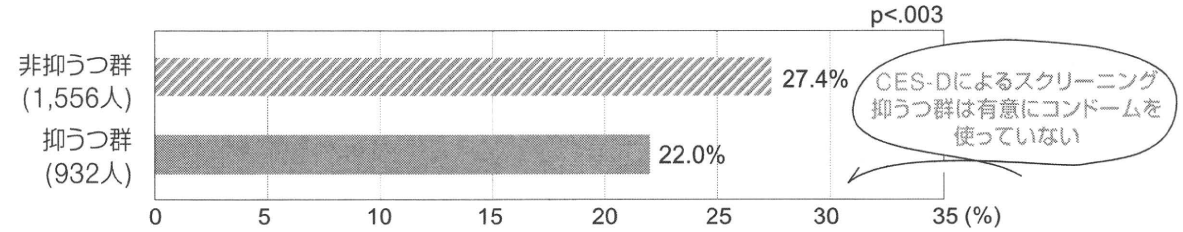
過去6ヶ月間にアナルセックス経験者のコンドーム使用状況に基づいて、コンドーム常用群と非常用群に二群化しました。その上で、セックスに投影される心理とコンドーム常用の関連について分析したところ、セックスに心理的なことを投影している人のコンドーム常用割合は、心理的なことを投影していない人のコンドーム常用割合と比較すると、明らかにその割合が低いことが示されました。コンドームを使用して予防を実践することよりも、セックスの相手との関係性が優先されることや、コンドームがセックスの相手との親密さを阻害することがあると感じられていると言えるでしょう。あるいは、コンドームを使わないことで、相手とつながり合いたい自分の気持ちを積極的に行動で表そうとしているとも考えられます ⑯ 。

⑯ 過去6ヶ月間のアナルセックス経験者におけるセックスに投影される心理とコンドーム常用の関連(分析対象数2,488人)



コンドームを使わない背景にはこのような心理的な理由があり、コンドームを使わないという選択を無意識のうちに自らしている現状があるのかもしれません。この結果は2003年の調査結果と全く同様の傾向でした。また、抑うつ群は非抑うつ群と比較するとコンドーム常用割合が低いこともわかりました⑰。

⑰ 過去6ヶ月間のアナルセックス経験者におけるコンドーム常用と抑うつの関連（分析対象数2,488人）

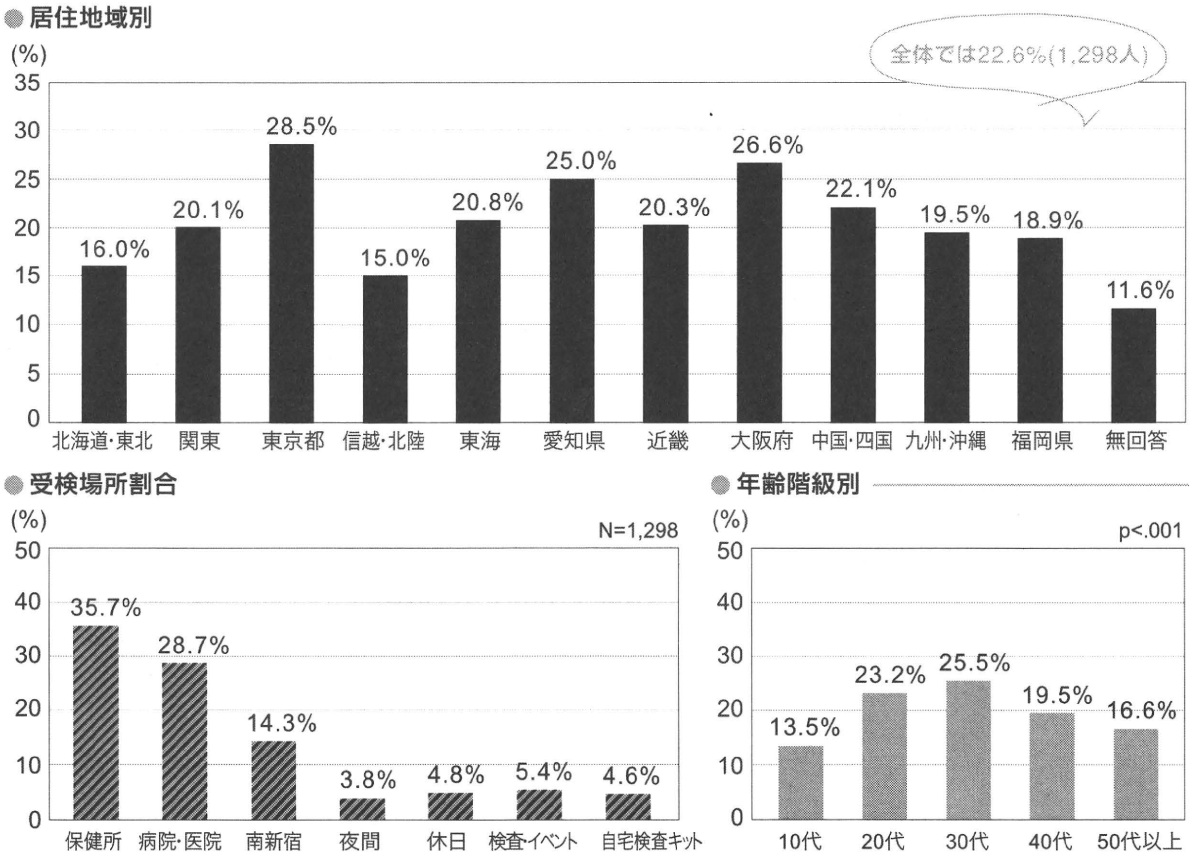


過去1年間のHIV抗体検査受検状況およびHIV陽性割合

過去1年間のHIV抗体検査受検割合は22.6%であり、年齢階級別では20代～40代は20%以上、10代と50代以上の受検割合は比較的低率でした。過去6ヶ月間のコンドーム常用割合が低い年齢層は10代と50代以上であると前述しましたが、リスク行動が顕著な年齢層は過去1年間にHIV 抗体検査を受検していないことが示唆されています。居住地域別では関東地方、東京都、東海地方、大阪府、近畿地方などの都市部在住者の受検率は20%を超えており他地域よりも高率でした⑱。若年層や中高年に対してコンドーム使用を促すと共に、HIV抗体検査受検を促進することも必要であると考えられます。また、都市部在住者以外の受検割合の低さを理由に「HIV感染症は都会の問題だ」と捉えるのではなく、都市部以外でゲイ・バイセクシュアル男性は検査を受けづらい環境にあると考える必要があるように思われます。また、検査受検場所は保健所が最も多いことが明らかとなっており、地域の保健師に期待される役割や責任は大きいことがわかります。

自己申告による性感染症の既往歴は、5,731人のうちHIV感染症5.3%、梅毒10.6%、B型肝炎7.3%でした。

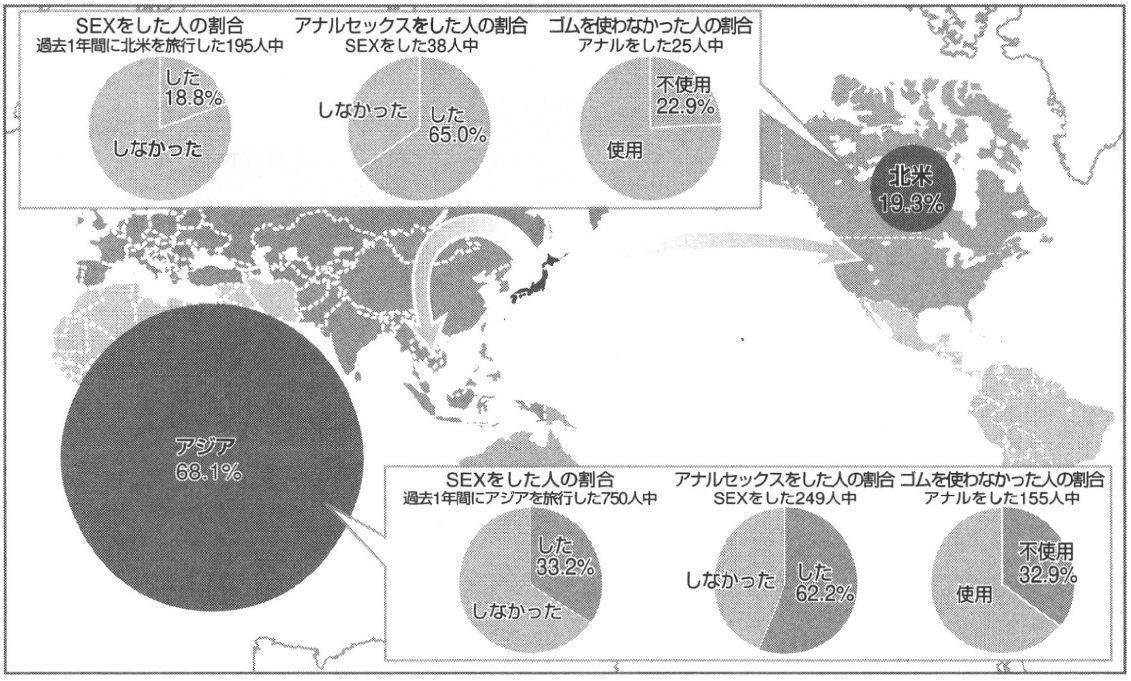
⑱ 過去1年間のHIV抗体検査受検状況（有効回答数5,731人）



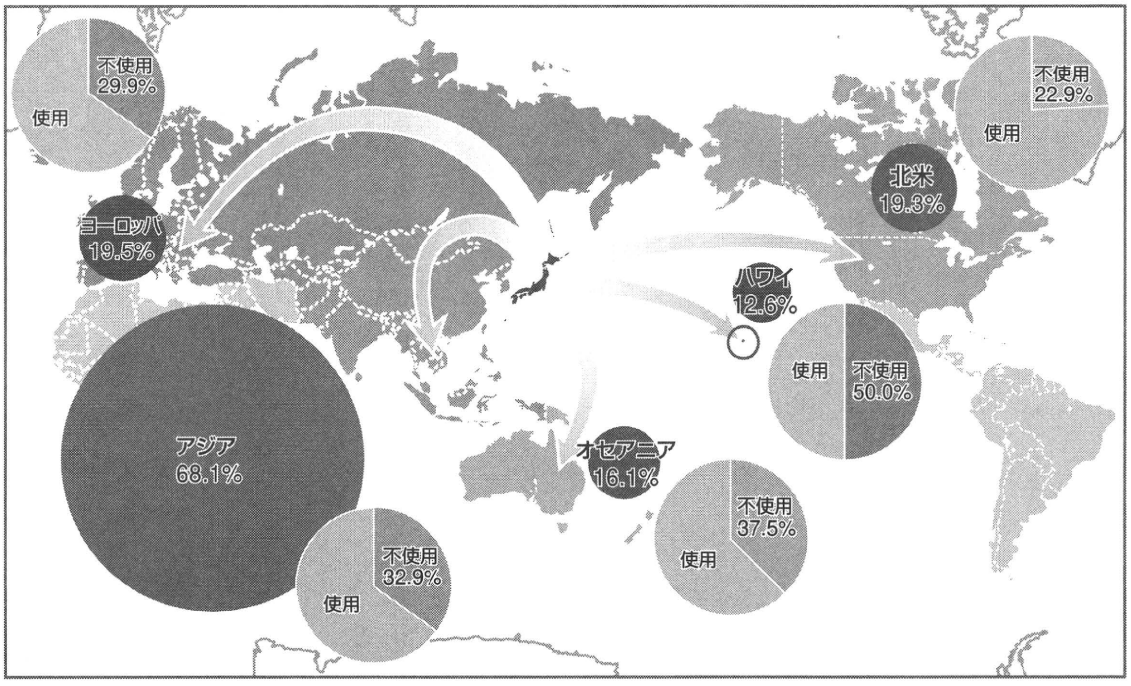
ゲイツーリズムとHIV予防行動

2008年に実施した調査（有効回答数5,525人）では、旅先での性的活動状況について尋ねました。過去1年間の公務出張などを除くプライベートな海外旅行経験割合は全体の19.9%（1,102人）でした。この1003人の主要旅行先の内訳は北米19.3%、ハワイ12.6%、オセアニア16.1%、アジア68.1%でした。アジア諸国は日本からも近いため多くの人が訪れており、国別ではタイ・台湾・韓国・中国・香港の順で、アジア旅行経験者のうち、33.2%は旅先で出会った男性とのセックス経験があり、そのうち62.2%はその場でアナルセックスあり、コンドーム不使用割合は32.9%でした ⑲⑳。

⑲ 海外旅行と性行動（北米・アジア）

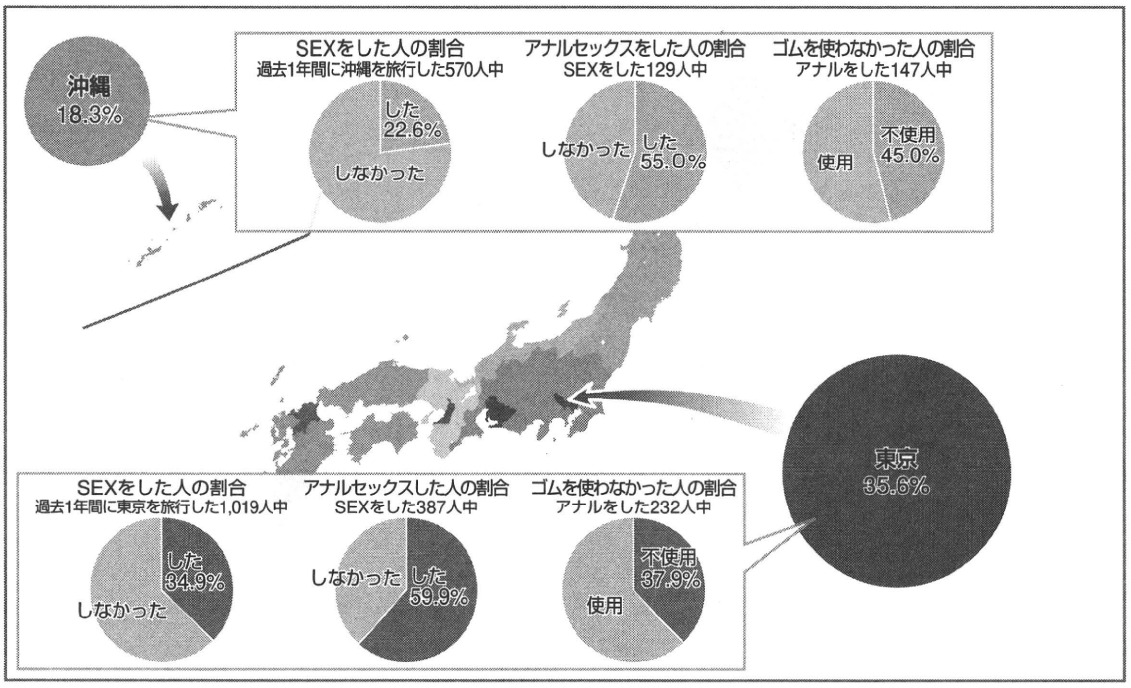


⑳ 海外旅行と性行動（概要）

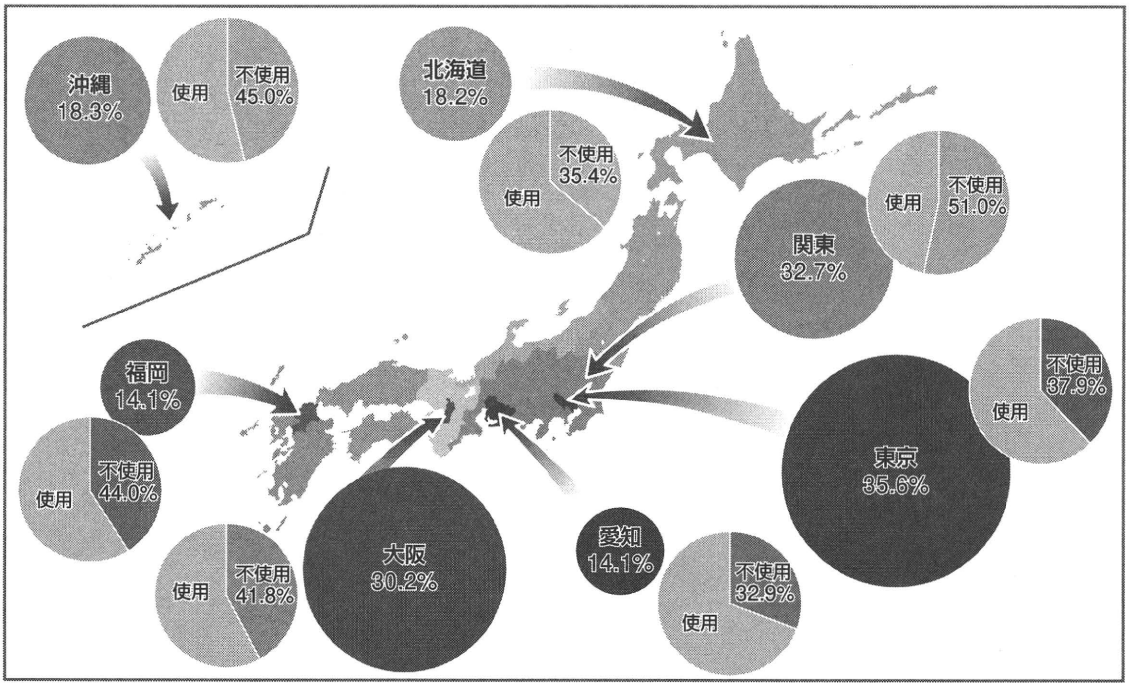


同様に、国内旅行経験割合は56.3%(3,116人)でした。内訳は、東京35.6%、愛知県14.1%、大阪府30.2%、沖縄県18.3%などでした。国内旅行経験者のうち30%以上(1,109人)は東京への旅行経験があり、そのうち34.9%は旅先で出会った男性とセックス経験あり、59.9%はアナルセックスあり、コンドーム不使用割合は37.9%でした。また、国内南端のリゾート地である沖縄への旅行者のうち22.6%(129人)は旅先で知り合った男性とのセックス経験があり、そのうち55.0%はアナルセックスあり、コンドーム不使用割合は45.0%でした。沖縄での性行動とアジアでの性行動を比較すると、沖縄でのコンドーム不使用割合が高率でした㉑㉒。

㉑ 国内旅行と性行動(東京・沖縄)



㉒ 国内旅行と性行動(概要)



HIV抗体検査の受検のときに経験したこと

HIV抗体検査受検時に、ゲイ・バイセクシュアル男性は適切な健康支援を得ることが出来ているのでしょうか?検査業務に関わる医師や保健師の多くが、検査を受けに来た男性は異性愛者であり、「セックスの相手は女性に違いない」という先入観を持ち、女性とのセックスを前提にして話を進めてしまうことがあります。そういった状況では、ゲイ・バイセクシュアル男性は本当のことを話すことなく検査が終わってしまうばかりか、男性同性間のHIVや性感染症の予防に関する適切な情報を提供されないまま、検査機会を終えてしまうことになります。HIV抗体検査時に経験したことについての自由記述によれば、「彼女がいるかどうか」「風俗に行ったことがあるかどうか」といった会話を医療者からされている現状があることが垣間見られます㉑。ゲイ・バイセクシュアル男性にとって受検しやすい検査環境を整備するために、HIV抗体検査に従事する者を対象とした、セクシュアリティへの正しい理解や支援スキル習得を目的とした研修を実施することも、今後必要な施策のひとつであると考えられます。

㉑ ゲイ・バイセクシュアル男性が検査・相談場面で体験したこと－保健師や医師による対応の実情－

- 電話受付の人に「いかがわしい行為をしてからどの位たってる?」と聞かれた。
- 大声で他の職員に「この人HIVの検査しに来たんだって。○階の部屋だったよね?」と言われ、みんなにじろじろ見られた。
- 「あなた真面目そうな顔して経験多いのね」と女性の医師や看護師に言われたことがある。こいつらには、絶対俺たちの気持ちは理解できないと感じ、何も話す必要はないと思った。
- 保健師から「ボーナス出た時期だから風俗でも行ってうつされたんでしょ?」と言われた。
- 「検査に来る人は、心あたりがある人が大半」という言われ方をしたのですが、彼氏と一緒に受けている人は将来を考えての検査を受けているわけで、遊びほうけているみたいな見方をされるのは心外だと思いました。
- 「そういうこと」という言い方を何回もされた。何を指している言葉なのか、保健師の使う言葉が曖昧だった。
- 「あなたはゲイでよろしいですか?」とゲイであることが前提とされた質問をされて驚いた。
- 「またゲイかよー」という感じで保健師の対応がすごく悪かった。ゲイエリアのすぐそばの保健所だったのに…

ゲイであることを告げると、「 あなたハイリスクだわ」とあきれ果てながら言われ、「ハッテン場にも行くの?」と質問された。わずかに知っているゲイ関係の知識をもとに、ゲイのことを相当に危険と思っている態度だった。

3度目の検査の時、「そんな遊びしちゃダメじゃない」と言われた。自分の健康の確認に来ているのに、私生活について言われたくないと思った。それ以降、検査に行っていない。

かなり説教じみた感じで10分程度話した後に検査を受けさせてもらえたが、「 もうこんな検査受けないように努力しなさい」とまで言われた。言いたいことはわかったが、一方的すぎる気がしました。

20回目の検査の時に回数の多さに驚かれてしまったようで、さらに「ハッテン場(「そういう」ところという表現をされた)ばっかり行っていたら…」みたいなことを言われた。
そんなの百も承知なんだけれど。それ以降、検査に行っていない。

「検査は税金なので、頻繁に何度も検査に来ないように」と言われた。

他の人の検査結果が丸見えだった。友達と一緒に行ったので連番で、友達の結果も見えてしまった。

廊下で座って順番を待っていたとき、検査室での会話が筒抜けで驚いた。告知を受けている人の名前が聞こえてしまった。

HIVに感染しているという告知を受け、他の感染症もすごく忌まわしい表情で指摘され、本当に厄介者って感じの対応だった。さらにゲイであることを告げると、「納得した」 ような表情で接しられ、不快感を覚えた。

結果を聞きに行ったらみんなと別室に案内され、しかも案内の人が急に電話をかけまくった。
その上、HIV陽性の告知を受け、担当の医師から「あんた死ぬよ」と脅された。

最近、迅速検査が導入され始めました。僕はその検査で陽性かどうか判定保留と診断され、ろくな精神的サポートもされず検査機関を出ました。何を訴えたらいいかわからなかったからです。1週間後に正確な診断が出るとのことでした。その日の夜は不安で仕方なく迅速検査についてインターネットで調べても、十分な情報は得られませんでした。「迅速検査での判定保留は本当に陽性の可能性が非常に高い」という誤った情報をインターネットで知って、僕の精神状態は自殺寸前でした。1週間後、陰性であることがわかったけれど、精神的なサポート体制が何もない迅速検査は即刻やめるべきだと思います。

自由記述欄に寄せられた声をまとめるにあたって（2003年調査の結果から）

ゲイ・バイセクシュアル男性を対象に2003年に実施したインターネット調査の有効回答数は2,062人でした（研究実施期間:2003年2月28日～5月16日）。質問票の最後に設けられた自由記述欄には、全研究参加者の約32.1%に当たる661名が記述を行っていました。長文のメッセージも多く、原稿用紙数枚分に及ぶものもありました。この自由記述欄は、選択式の質問票に回答するだけでは表現しきれなかった思いを表出し、研究実施者に伝えたいという、研究参加者のニーズを受け止める役割を担ったことにもなると考えられます。またその記述内容は、本調査に参加した感想や研究参加者が日頃考えていることなど、非常に多岐に渡っています。これらの記述の多くは、医学系の学術機関に所属する研究者や心理カウンセラーがこれらの記述を読むという前提があったことによって、研究参加者が自分の心情を吐露する上での安心感が生まれたことや、異性愛社会に対する自分たちの思いの代弁者としての期待が託されたことを推測させるものでした。私たちも彼らの強い思いに心を動かされ、是非とも多くの方に当事者の声を伝えたいと考え、ここに報告する記述内容の分析とまとめの作業を行いました。

自由記述欄に書かれた全ての内容を、9つのカテゴリーに分類しました。9つのカテゴリーとは、「本調査の技術面に関する指摘や批判」「本調査の内容・テーマ・意図への疑問や批判」「本調査への期待・要望・感謝」「本調査による心理面・予防行動への介入的効果」「研究展開への期待」「日頃感じていること」「情報提供の希望」「その他」「分類不可能」です。本報告書では「日頃感じていること」のみ掲載しました。分類方法の詳細やその他の記述カテゴリー内容についてはホームページをご覧下さい（http://www.joinac.com/spirits-wave2）。

2003年に実施したインターネット調査は、平成14年度厚生労働省エイズ対策研究事業「HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究」（主任研究者・木原正博）および平成15年度厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究」（主任研究者・市川誠一）の研究として実施されました。また、本研究はIRB(Independent Review Board)として京都大学医学部「医の倫理委員会」による研究計画の審査および同委員会の指針に基づき、実施しました。

●研究組織

日高　庸晴　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

市川　誠一　名古屋市立大学看護学部

古谷野淳子　松浜病院

浦尾　充子　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻遺伝カウンセラーコーディネータユニット
千葉大学附属病院カウンセリング室

安尾　利彦　国立大阪医療センター／財団法人エイズ予防財団

木村　博和　横浜市南福祉保健センター

木原　正博　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

ゲイ・バイセクシュアル男性であること

- 周りにカムアウトはしていないけれど、自分がゲイであることを恥じていないし、自分には肯定的です。
- 同じゲイの友達もいるし、彼氏もいて、毎日に十分満足している。
- 一般の人たちよりも物事を広い視点で捉えることができるようになったし、差別される立場の人の気持ちも理解しやすいと思うので、ゲイに生まれてよかった。
- 自分はゲイだのなんだの、と気にして生きてはいない。
- 社会のしがらみから離れて、自由に生きられるライフスタイルや環境を作ってからは、ストレスから自分を守ることができるようになった。
- 本当は女性を愛したいし、ゲイであることに後ろめたさを感じる。
- 世の中ではゲイであることを肯定しようとする運動が盛んだが、自分は違う。男性に性欲を感じるが愛したいのは女性。つまりゲイではなくなりたい。ゲイとして生きることを否定する生き方もあっていいはずだ。
- ゲイとして生きることを認める動きが盛んだけれど、自分にとってはそれが逆に負担。なぜ声高に自分のセクシュアリティをカムアウトしなければならないのか、理解できない。
- 少子化が進んでいる世の中で、子孫を残さないゲイへの視線が冷たくなっているように感じられて、辛い。
- 以前自分がゲイかバイかもしれないと認識したときはショックで悩み抜いた。社会人になってゲイコミュニティに触れ、決して極端なマイノリティでないと知り、これもありなのかな、と思うようになった。
- 取り立てて幸せでもないけれど、ゲイだからといって不幸せな人生だとも思っていない。
- 自分がゲイであることを受け入れられたし、周りも受け入れてくれたので今は特に悩んでいないけれど、将来のことを思うと不安になる。
- ゲイであることの苦しさは自分で分かっているのに、生まれ変わってもまたゲイになりたいという気持ちもある。
- 一番心配なのは同性愛的なものが遺伝するかどうかだ。遺伝しないのであれば、努力して家庭を築いていこうと思うものも多いように思う。
- ゲイがたくさんいる海外に生活しているので、今はとても自由で幸せだが、日本に帰った時のことを思うと気が重い。
- 自分は後天的な要素でゲイになったと思う。しかし誘われて引き込まれてしまうと簡単には戻れなかった。
- 私自身自分から好んで同性を愛したい、欲したいという人間になったわけでなく、先天的なものだと思っている。
- どうしてゲイになるのか…このメカニズムは多様だろうが科学的に何かが分かれば嬉しい。
- もし自分の性的指向がわかる身体的実験があったら参加してみたい。

考察

自分の中の同性愛性を自覚する研究参加者の中でも、その性的指向をどのように受け止めているかについては様々な記述がありました。肯定的に受け止めている人もあれば、罪悪感や違和感を持つ人もいます。苦悩していた過去を経てようやく今は肯定的に考えられるようになったという人がいる一方で、現在の肯定感は良い環境や人間関係に支えられており、それが変わればたちまち損なわれてしまうかもしれない流動的で不確かなもののように感じている人もいます。さらに、自分が愛情や性の対象を同性に求めることの原因を、先天的あるいは後天的なものと思う人、そのどちらとも判らず、答えを求めている人もいます。遺伝するものかどうかを知りたいという記述には、性的指向に関して自分が味わった苦しみを子どもには負わせたくないという気持ちが表れていました。

異性愛が普通で正常とされ、それ以外は異端視されたり病的なもののように扱われかねない社会の中にいることで、ゲイ・バイセクシュアル男性は程度の差はあれ、自分の性的指向について自分の中での収まりどころを見つけるのに時間とエネルギーを要しているものと考えられます。異性愛者の多くが、成長過程で自分の性的指向をことさら「受け入れる」というプロセスを要しない、あるいは理由を問う必要のない自明のこととして、努力や葛藤なしに受け入れられるのとは大きな違いがあります。

同性愛や両性愛を否定するようなメッセージを不快に思うのはもちろんですが、一面的に「悩むことではない、肯定すべきだ」とするメッセージにも、自分の気持ちとのずれを感じる人もいます。教育現場や保健・医療・福祉領域での相談場面でも、性的指向に関連する悩みがテーマとなった時には「個々の感じ方の差異があること」や「受け入れるプロセスも人それぞれのペースがあること」を前提に、相手を個別の存在として理解しようとする姿勢がまず必要でしょう。

差別や偏見のある社会に対して願うこと

- ゲイに対する偏見のない、自分たちにとって住みやすい社会になって欲しい。
- 「ホモ」とか「オカマ」という呼び方には、偏見がこもっている。
- 自分たちはただ同性が好きなだけで、何も悪いことはしていないのに、バッシングや中傷をされるのはおかしいと思う。
- 同性愛が、異性愛者には理解できない愛の形だと思われるのは分かるが、同性愛が「おかしい・異常だ・人間のくずだ」と差別される社会にはなって欲しくない。
- ゲイは性的な指向が異なるだけであとは普通の男性です。抵抗無く接してくれることを望みます。
- 同性愛者も異性愛者も、1人の人間としての価値は同じはずだ。
- ゲイを「汚いもの」とか「異常なもの」というふうに捉える異性愛の社会に不満を感じる。
- 世の中には多様な性のあり方があることを、もっと理解してもらいたい。また、同じゲイでも色んな趣味趣向の人がいることを分かってほしい。
- 世の中の人全てに、「同性愛を認めてくれ」と理解を強要する気はないけれど、せめて同性愛者であることを苦に自殺するようなことが起こらない社会になることを願っている。

- 理解してもらいたいとまでは思わないが、せめて無視でもいいから、黙ってみていてほしい。
- 自分たちのことを理解してくれる人が世の中に増えてほしいと願っている。
- 恋人と街を歩くときに、周りの目を気にせずに手をつなげるような社会になってほしい。
- 周囲の女性は「ホモってかっこいい」などと言うが、私が「同性愛者だ」とカミングアウトすることによって、関係が崩れるのではないか、見る目が変わるのではないかとものすごく不安になる。
- 社会的に普通に「存在している」事がわからない人が、いまだ多いと感じる。
- ゲイや同性愛について、もっと日常で正しい知識を一般の人に知ってもらえる場ができれば、今より少しは暮らしやすくなるのではないか。

考察

ゲイ・バイセクシュアル男性について、社会的な理解を求める記述は数多く見られました。揶揄や蔑視、時には異常者扱いするような言葉を見聞きすることは傷つきの体験になり、逆に過度に理想化されたイメージで語られることにも、自分とのズレを感じて不安になることがあるようです。もっと理解してほしい、という声の一方で、理解までは望まないからせめて自分たちの存在を否定せずに黙ってみていてほしい、という声もあります。差別や偏見によってこれ以上否定されて傷つきたくない、当たり前の生活をしている普通の人間として、身近に存在していることをそのまま認めてもらえるような社会であってほしい、という切実な願いが伝わって来ます。

ゲイコミュニティ

- 同じゲイの人と出会えたことで、1人だけじゃないんだと思えて、自分を認められるようになった。
- スポーツや文科系のサークルがたくさんあるので、コミュニティの中で充実した生活を送ることができる。
- 東京に出てきたら、ゲイコミュニティに出会ったし、思いのほかゲイの人はたくさんいるんだなと思った。
- セックスの相手だけを求めている人が多いような気がして、うんざりすることがある。
- 昔はよくバーにも顔を出していたが、人間関係の複雑さや他人の噂話に嫌気がさして、行かなくなった。
- ゲイの中には、生育歴が複雑で、今も精神的に不安定な人が多いように思う。
- 社会性に欠けるなど、ゲイの世界には様々な問題を抱えている人がいると感じます。
- ゲイのコミュニティだけでなく、バイセクシュアルのコミュニティも確立してほしい。
- ゲイコミュニティではバイセクシュアルは嫌われる存在なので、たまにゲイコミュニティの中でも自分の居場所がないなと感じることがある。
- コミュニティで出会う人の中には、お金やセックスにルーズな人が少なくないように思う。

- ゲイコミュニティには、閉鎖的で排他的なところがあると思う。
- カウンセリングよりも、ゲイ同士が出会える出会いの場がほしい。発展場やバーでなく、普通に出会える場がほしい。
- ゲイの世界にはセックスをする人数はヘテロより多いのが普通という考えがあり、それを新しく入ってくる若い子に押しつける。だから心理的にできていない子は、性に対する考えが甘くなって行くと思う。
- この世界はまずセックスから入るのでなかなか難しい。
- ゲイはもっと世間で受け入れられるべきだとは思うが、ゲイ同士での差別などもあり、みんな仲良しこんにちは、とはなかなかいかない。
- ゲイの世界の人間関係に疲れることも多い。もっと信頼しあえて精神的な充足感が得られるような人間関係を築きたいといつも思う。
- ゲイを認めない今の社会を嫌だと感じるならば、自分たちゲイもそれを変えられるように行動を起こしていくべきだと思う。
- 今の日本はまだ同性愛に対する差別が強いというが、実際は同性愛者の方が世間を拒んでわかってもらおうとしていないだけのように感じることもある。
- ゲイが社会的に認められていないことには、自分たちの責任もあると思う。セックスが前提の出会いなど、誤解を招くようなことは自分たちで払拭していくべき。
- インターネットを通じて、若いゲイがかなり自由気ままに何の警戒心もなく交際しているようなので、別の意味でゲイが非難されるのではないか。もっと節度を持って行動してほしい。

考察

ゲイコミュニティに参加して、同じ性的指向の人に出会ったり、性的指向を隠さずにいられる仲間とサークルを作ったりすることで、孤立感から解放され自分の存在を肯定できるようになった、という記述がありました。ゲイコミュニティがあること、また実際にそこに参加することで、救われ、支えられているゲイ・バイセクシュアル男性は少なくないと思われます。

その反面、ゲイコミュニティの中で体験することへの違和感や懸念の記述も見られました。例えばコミュニティ内部にもある差別や排他性、性行動を煽るような集団規範、セックス優位で長続きしない人間関係の繰り返し、無責任な人間関係の在り方などです。そうしたことによって精神的な充足感や安心が得られない疲労感を持つ人もいます。ゲイコミュニティの外でも中でも、安心できる人間関係が得られない、居場所がないと感じることは、とても寂しく不安なことではないかと思います。「ゲイ同士が普通に出会える場がほしい」という意見には、もっと違う出会い方、関係の作り方を求める気持ちが窺えます。

一方、社会的な理解や存在認知を求めるならば、自分たちから外に働きかけ歩み寄る、あるいは内部にある問題点を自分たちでよりよく変えていこうとする姿勢も必要なのではないか、との意見もありました。ゲイ・バイセクシュアル男性へのHIV予防介入や支援を考える上で、このような自己変革への意欲や動機づけも、コミュニティに内在する力として十分に尊重すべきものと思われました。

ゲイ・バイセクシュアル男性として生きること

- 同性愛者であることを隠さなければならない状況の中で、自分なんていなくてもいいと思うことはよくある。
- こんな自分はこれからどうやって生きていくのか不安だ。
- 自分の存在意義が見出せない状況が無気力な生活を生み出すことに関連性を考えられるのではないか。
- 今の日本は海外に比べて同性愛についてあまりにも無関心というか否定的な考えが多くて、自分がまるで犯罪者のような気さえ持ってしまう日々です。
- もっと同性愛への理解者が増えて、仕事場でも胸を張って自分の意志表現・存在証明ができるようになるといいなぁと思う。
- 好きな人に好きだと胸を張って言い、その人とデートをし、皆に祝福されたい。本当にそれだけでいい。でも、それがなかったら人は何のために生きているのか。
- 同性愛者として異性愛社会に生きなければならないことは、毎日自分自身がダメな、欠落した人間なのだ、と思わされて暮らすことに他ならない。そのストレスの苦しさは想像を遙かに超えたものです。
- 日本はゲイの人が仮面をかぶって生活しなければならない。自己否定を続けていると、生きることができなくなりそうです。
- 同性愛者としての自分と異性愛者としてふるまう自分とにものすごく隔たりを感じるとともに、そのことがストレスになっている。
- 自分がゲイであることを隠すのは正直言って辛い。嘘をついて生きていくことになるから。

考察

ゲイ・バイセクシュアル男性が社会的に否定されていると感じることで、自分の存在意義に対して懐疑的になり、生きる意欲や希望すら持ちにくくなっている研究参加者もいました。性的指向は「自分とは何か」というアイデンティティを構成する重要な要素です。それをひた隠しにして社会生活を送っていることで、自分を偽っている、あるいは二重の自己を生きているような感覚がもたらされ、辛さや罪悪感、ストレスとして感じられていることが窺えます。ここには、自分が直接的に差別や偏見の対象となるような出来事に出会わなくても、自己否定感を抱え続けたり、ありのままに生きられない日常が続くことが、「生きることができなくなりそう」なほどの重大なストレスになり得ることが示唆されています。

若い世代への懸念

- ゲイの世界は20代～30代前半の若者が主流と思うが性感染症についての啓蒙が追い付いていない。病気やメンタルのことも経験のある中年層の存在が必要と思うが、若者だけの世界が固まることで年齢層の壁ができてしまうため、難しいだろう。
- 一人で悩んでいる若い同性愛者も多いはず。昔の自分がそうだったから。
- 特に若い人にとって住みよい社会にしていきたい。私が感じ取ってきた思いと同じ精神的な苦痛からの解放を保証してあげたい。
- 出会い系サイトで中高生の投稿を見かけると複雑な心境だ。自分が悩んでいた分、彼らが羨ましい一方で、決してキレイではないこの世界に早くから染まってしまうのは彼らのためになるのか…。
- 孤独感を募らせている若年の同性愛者が将来への不安感や孤独感から自暴自棄な行動に走る場合も少なくない。例えば、体を売る、ホモビデオに出演するというのは個人の自由だが、それを若い時に自暴自棄でしてしまうことはおそらくリスクが高すぎるし、これからの若い同性愛者たちのためにも何らかの政治的な手段を講じて防ぐ努力をすべきである。

考察

より上の年代の研究参加者から、若い世代の心身の健康を真剣に心配し、何か力になりたいという気持ちが示されています。自らが経てきた苦悩を若い世代には味合わせたくないと願い、あるいは自分たちの頃にはなかったリスクに現在の若い世代がさらされていることを懸念しつつも、具体的にはどうしたらいいかわからないと思っているようです。また無防備なままコミュニティに飛び込むことで、その影や闇の部分を知ってしまい、若い世代の心がすさんでしまわないかという心配もあるようです。

これまでHIVや他の性感染症の予防介入では、数々のコミュニティベースの試みが実践されています。性的指向を同じくする者同士で、ニーズに則した具体的な情報提供や助言を提供できる点や、行動面でのモデルを示せる点がメリットと考えられるからでしょう。しかし具体的な知識や情報ばかりでなく、上記に見られるような、コミュニティに潜在している連帯感や愛他的な精神そのものが何らかの形で表現され、伝わる機会や場を作り出すことが、予防介入をより有効にする基盤作りとして重要と考えられます。上の世代から性的な対象として関心を持たれるばかりでなく、人間として心配されたり大事にされたりしていると感じることができれば、若い世代が自尊心やコミュニティへの信頼感を育んでいく一助となるのではないでしょうか。